

「香港中文大学サマープログラム参加報告書」

京都大学法学部5年 松本 晏奈

この度、香港中文大学での3週間のサマースクールに参加し、北京語学習、中文大学の学生やサマースクール参加学生との交流の機会を得、またプログラム内の小旅行を通じて、香港だけでなく、澳門や深圳を訪れました。プログラムを通じては、個人として大きく二つの効果を得ました。

一つ目は北京語能力の伸長です。自身は北京語学習において、2013年から2014年にかけて第二外国語として学び、2016年末から、もう一度学び直そうと自身で学習を再開しましたが、テキストでの学習が多く、「読む・書く・話す・聞く」のうち、ほとんど「読む・書く」に重点を置いていました。今回のプログラムで私が受講したクラスでは、授業のほとんどが北京語で行われ、必然的にほとんど毎日5時間ほど常に北京語が流れている環境に置かれたこと、また、授業内外での発言やプレゼンテーションを通じて、自ら北京語を発する機会を多く得たことから、「話す・聞く」に重点を置いた3週間を送ることが出来ました。それは、3週間の授業から得られる語彙や語法の知識量は限られているとは言え、それ以上に、自身の北京語学習において、北京語を自らの口から発することの心理的抵抗を大きく減らし、今後の学習深化を円滑にする基盤を与えてくれたように感じています。

二つ目の効果は、香港という土地への理解の深化です。数年前に一度、3日間程旅行で香港を訪れたことがありましたが、当時は“観光客”という枠を出ませんでした。この度3週間という一定のまとまった時間で生活を香港で過ごし、土地に根差すものを積極的に自ら経験し、また、現地の人々と多く触れ合う機会を得たことによって、香港という土地に対する理解を大きく深めることが出来たと考えます。

昨年は交換留学オーストラリアにて国際関係学等を学び、日本国外から日本に関わる問題、関わらない問題について学習し、議論を交わして過ごし、その1年間を終えた際、自らが、これまで通りまるで当然のように日本人であるという意識と、地球に人間として生まれその場所が偶然にも日本であったというような、自分が地球人であるという意識の両方を感じていました。この度香港で3週間を過ごしプログラムを終え帰国する、その帰路でも、自身が日本人であることを、同様に、もしくはより強く相対的に感じていました。日本国外でまとまった時間を過ごすことが自身に与えるこの感覚の貴重さを実感し、これから将来においても、留学等の、自身に新たな、もしくは異なったものの見方の存在を与え、また、思い出させてくれる機会を人生の中で多く享受していきたいという気持ちを得ると同時に、また、この自身を相対的に捉える感覚を忘れず、これからも国際問題に関心を持って自覚的に生き、地球人として、世界中の人々の生活の豊かさを増幅していきたいという思いを、自分の中で再確認する機会になりました。